

スカパー JSAT がアジアナンバーワンの存在感を示した 「サテライト・インダストリー・フォーラム 2018」

神谷 直亮

アジアケーブルテレビ衛星放送協会 (CASBAA) が主催する「サテライト・インダストリー・フォーラム 2018 (SIF2018)」が、6月25日にシンガポール市内のフォーシーズンズホテルで開催された。

第23回を迎えた会場には、CASBAAの中核メンバー100社の代表を含め世界各国から約450名が集い、喧々譁々の議論を戦わせていた。日本からは、スカパーJSAT、放送衛星システム、三菱電機などが参加して存在感を示した。特に、スカパーJSATは、ネットワーキングを目的とした昼食会のスポンサーを引き受けて、アジアナンバーワンの衛星通信・衛星放送事業者としての役割を果たしていた。また、ルクセンブルグのSESが、今回も4Kのデモをロビーで繰り返して注目的になった。興味深かったのは、ウルトラHDではなく、「ウルトラ・バイブラントHD (Ultra Vibrant HD)」という新しい名称を使って「ダイナミックレンジ、色域、ビット深度など、最高レベルの映像を再現している」と強調していた。

「SIF2018」における目新しい出来事は、CASBAAの会長がクリストファー・スローターからルイス・ボスウェルに代わった。今回のオープニング・スピーチに登壇したボスウェル新会長は、「サテライト・インダストリーは、現在、前代未聞の変化と進化に直面している。目まぐるしく移り変わるこれら数々の変化と進化を、今後の成長の

ための糧にするよう心がけよう」と切り出し、具体的には、「アジア各国における規制の変化、衛星メーカーや衛星打ち上げ事業者によるイノベーション、低軌道・中軌道周回衛星の急増、OTT事業者の進出によるビデオ・エコシステムの変化、5Gの到来」などを挙げた。最後に「本フォーラムで、これらの著しい変化や進化に対応するための活発な質問やコメントを歓迎したい」と述べて締めくくった。

この後、新会長が進行役となって始まった「SIF2018」は、基調講演が3回、セッションが7回という構成であった。

基調講演のトップバッターは、SESネットワークスのジョンポール・ヘミングウェイCEOで、「衛星通信業界におけるもっとも顕著な変化は、ワイドビームの需要が年々に数パーセントしか増えていないのに対し、マルチビームを駆使するハイスループトサテライト (HTS) の需要が急激に伸びている。2022年には、2017年の268%増が予想される。これを踏まえて、SESネットワークスは、mPower中軌道周回衛星プロジェクトを立ち上げ、大容量高速インターネットサービスを展開することにした。7機で構成されるmPower衛星は、すでにボーイングで製作が始まっており、2021年から打ち上げを開始する」と語り聴衆の関心と呼んだ。講演では、mPowerプロジェクトの詳細は公表されなかったが、会場の専門家によれば、1機1Tbpsの超大容量衛星で4000ものスポットビームを駆使

するという。用途については、移動体通信、ビデオ配信、5Gのバックホール、IoTなどすべてが視野に入っていると見なされている。

2番目に登壇したのは、ボーイング・サテライト・システムズ・インターナショナルのクリス・ジョンソン社長である。同社長は、「ニュースペースの時代が始まった」と切り出し、次世代を代表する衛星として自らが製作中のmPowerとViasat-3衛星を取り上げた。どちらも超大容量高速伝送を誇るHTSで、違いはmPowerが中軌道周回衛星で、Viasat-3は静止軌道衛星である。最後に、「ボーイングは、HTSに欠かせないデジタルプロセッサの高機能化に絶えざるチャレンジを行っており、今後も継続してニュースペース時代の最先端に行く」と強調して締めくくった。

最後の基調講演に登壇したのは、バイアサット社のマーク・ダンクバークCEOだ。同CEOは、「10年ほど前に、地上系との競争に勝つにはどうしたら良いか、地上系より衛星系のサービスの方が、よりよい選択肢だと言ってもらえる方策はあるのかについて考えを巡らせた。この結果生まれたのが、HTSだ。すでにバイアサット1、バイアサット2衛星でHTSサービスを始めており、さらに次世代のバイアサット3衛星を製作中である」と述べ、バイアサット3について「マルチテラビットの大容量を持ち、フレキシブルなグローバル・ブロードバンド・サービスを実現する衛星である。衛星のみでなく、地上のゲートウェイ局の効率を飛躍的に向上させ、ベターアクセス、ローアーコストのサービスを提供する。具体的には、バイアサット3は、バイアサット1衛星の約10倍の帯域を持ち、コストは約3分の1となる」と説明した。

7回を数えるセッションの中で最も脚光を浴びたのは、「アジアの衛星通信・衛星放送事業者のリーダーシップ」と題した討論会で、アジア放送衛星、アジアサット、APTサテライト、ユーテルサット・アジア、



写真1 「CASBAA SIF2018」のスポンサーには、スカパーJSATをはじめとしてアジアの衛星通信・衛星放送事業者が名前を連ねていた。

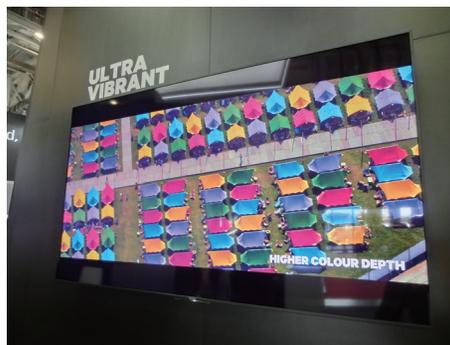


写真2 SESは、「ウルトラ・バイブラント4K」の再生デモを行って注目を集めた。



写真3 今回の「SIF2018」では、ルイス・ボスウェル CASBAA 新会長が登壇し、オープニング・スピーチを行った。



写真4 「アジアの衛星通信・衛星放送事業者のリーダーシップ」と題した討論会には、5社の代表が出席した。(向かって右端が、スカパー JSATの赤尾執行役員)



写真5 衛星メーカーと打ち上げサービスのセッションには、(向かって右から) ILS、ブルー・オリジン、SS/ ロラール、スペース X、ボーイングが登壇した。

スカパー JSATの5社の代表が出席した。今年からアジア放送衛星を率いることになったジム・シンプソン新CEOは、「昨年度ビデオ関連ビジネスが50%を占めるようになり利益率が向上した。具体的には、モンゴル、フィリピン、インドネシアにおける衛星放送サービスが順調に伸びている。今年度の狙いは、アメリカ政府関連のデータサービスだ」と語った。司会者から低軌道周回衛星に対する考えを聞かれたのに対しては、「衛星コンステレーションへの投資が巨額なことに加えて、カギとなる地上局設備の機能の高度化がまだできていないのが懸念材料」と答えていた。

アジアサットのCEOも5月にアンドリュー・ジョーダンからロジャー・トンに変わったばかりである。初登場のトンCEOは、「CEOに就任して、ハイスループットサテライト (HTS) とCバンドサービスという2つの課題に直面している。HTSについては、4年間に渡り検討を重ねているが、投資額と収益サイクルの観点からまだ結論に至っていない。Cバンドサービスを楽しんでいるアンテナ数は、アジア地域で400万を超えており、地上系の携帯サービスに譲るわけにはいかない」と同社の現状を率直に語っていた。

APT サテライトのファン・バオゾン 上席副社長は、「現時点で注力しているのは、HTSと中国のテレビ番組の配信サービスである。HTSについては、アップスター16衛星を製作中で、2019年に打ち上げる。中国のテレビ番組については、CCTVを始めとして10チャンネルの配信許可が取れたので、APSTAR TVプラットフォームを立ち上げてサービスを開始した」と述べた。ユーテルサット・アジアは、フランスのユ

ーテルサットのアジア支社で、シンガポールにオフィスを構えている。フェネック支店長は、「アジアでは、データサービスに力を入れている。実績としては、チャイナユニコム向けのユーテルサット172B衛星によるHTSサービスやファイジーでのインターネットサービスが挙げられる」と実例を挙げて存在感を露わにしていた。

スカパー JSATからは、赤尾光敏執行役員兼グローバルビジネスグループ長が出席した。同執行役員は、「会社の方針として、サテライトビジネスからスペースビジネスに大きく発想の転換を図っている。現在、静止衛星3機を製作中だが、スペースインテリジェンス、ドローン、レオサット低軌道周回衛星、KVHとの海上ブロードバンドサービスなどにも手を広げた。また、ペイテレビの分野では、12月1日から4Kチャンネルを現在の3チャンネルから11チャンネルに増やすことにしている」と、多角的なビジネス展開を強調した。

次いで、注目を集めたのは、「衛星とロケット」と題するセッションだ。昨年は、衛星とロケットのセッションが別々にセットされていたが、今回はタイトルが示すように合同の討論会となった。衛星メーカーから出席したのは、ボーイングとスペース・システムズ・ロラール (ロラール) で、打ち上げサービス事業者として登壇したのは、ブルー・オリ

ジーン、インターナショナル・ローンチ・サービス (ILS)、スペース Xの3社であった。ボーイングの代表は、「今年に入ってから、衛星のコストダウンと機能のフレキシビリティに注力している。具体的には、SESネットワークスのmPower衛星とバイアサットの3号衛星で実現すべく努力中」と具体例を挙げて説明した。

ロラールも「データセントリックな衛星の普及が進むと見ている。これを視野に心臓部のチャネライザーの高度化とフレキシビリティ機能の向上に注力している。具体的には、ヒューズのジュピター3衛星で実現を目指している」と述べた。

ブルー・オリジンは、「ニュー・グレン・ロケットの打ち上げを約束通り、2020年から開始するのが当面の目標」と述べ、スペース Xは、「2017年から試みている第一段ロケットの再利用を軌道に乗せることが第一目標」と語った。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト

SWE DISH

ニッサン新エルグランド4WD
5名定員

1.2m径・自動捕捉アンテナ搭載
車高2.2m以下 (地下駐車場可)

3.6 KVA NMG アイドリング運用
水圧エコ・ボール4m 搭載
強化サスペンション
国内 (100V) 海外 (240V) 対応
IPコントロール
ハイビジョン映像伝送
運転席からワイドマンオペレーション

SMART SNG
HD TV, 3D TV and IP OVER SATELLITE ECO OPERATION

スマート・サテライト・ニュース・ギャザリング

<http://www.bizsat.jp>

設計・製造・衛星通信のことなら
エーティコミュニケーションズ株式会社
TEL: 03-5772-9125

AT Communications k.k.